特249
818

純正日本人

650

日本革新黨本部編輯

始

特249
818

はしがき

皇國は今日その全精力（精神的・物質的）を總動員して、東亞新秩序創設の聖戰を戰つてゐる。東亞新秩序の創建と云ふことを別の言葉で云へば、亞細亞の解放、亞細亞の復興統一の上に立つ大亞細亞樂土の建設である。

この雄大壯嚴なる大理想の實現は實に我等日本民族に課せられたる歴史的使命であつて、今日我等は尊き同胞の血をもつて大陸の山河を清めはらひつゝ、この大聖業を現實に實踐してゐるのである。

だが、この大亞細亞樂土建設の聖業が、正しく、立派に完成されるか否かは、皇國日本が純乎たる本然の姿に維新せられるか否かによつて決せられるのである。大亞細亞樂土の中心であり大本である　皇國自身が今日の姿のまゝを以て、正しき、立派な大亞細亞樂土の完成を望むことは、絶對に不可能だと謂はねばならぬ。

かくて　皇國の維新はただに　皇國自身の問題たるのみならずして、實に廣く深く全人類の問題である。

然らば　皇國の維新とは何ぞや、これを一言にして云へば我黨綱領に明示する如

く『國體の本義に基く眞日本の顯現』である。更に然らばかくの如き皇國の維新は如何にして實現されるか。その第一義は何よりも先づ全國民が『純正日本人』に成り切ることである。この問題をおろそかにして、純正なる　皇國維新の翼讃も大亞細亞樂土の建設も得て望むことは出來ない。

我等は何よりもまづ『純正日本人』になり切らなければならぬ。

『純正日本人』とは何ぞや？

本書はこの問題に對して、正しく、明けく、且つ深く餘す所なく敎へ示してゐる再讀、三讀度を重ねて心讀する毎に無限の魂の糧を與へてくれる。さきに橋本景岳先生の『啓發錄の研究』を出版した本部は、茲に再び大いなる喜びを以て本書を全國の同志に贈る次第である。座右必携の魂典として心讀せられよ。

本書は我が國體學、史學の最高權威者たる某先生のある集會に於ける講演の筆記であるが、先生のお言葉のまゝに某先生と申上げて置く。

昭和十四年四月

日本革新黨本部にて

總務委員　神田兵三

敎育出版部長　會田甚作

純正日本人

これより純正日本人といふ題を以て、私共平素研究し、抱懷し、確信して居りますことの一端を申上げたいと思ひます。既に昨年二回に亘りお話する機會を得まして、多少重複する所がありませうが、この點御諒承の程御願致します。

世界大戰の結果、一敗地に塗れて慘憺たる辛苦の中に回復の道を辿りつゝある獨逸は、その苦しい努力の中に我々に他山の石として幾多の敎訓を示して居ります。その中に於て、私共の特に驚かされました事は、百年前に於ける獨逸復興の原動力となつたフィヒテの精神が、百年後の今日に猶依然として偉大なる力を持つてゐるといふ事であります。一哲學者フィヒテの精神により、ナポレオンの爲に殆ど全滅に瀕したる獨逸を見事に復興し、しかのみならず百年後の今日に於て、殆ど再起すること能はずと思はれた獨逸を再び振ひ起しつゝある事實を見て、深き感銘を覺えたのであります。

是は今より五年前の夏、私がベルリンに居た時のことでありますが、私の友人が或る學校を參觀して參りまして、驚くべき事實を話して呉れたのであります。その話に依りますと偶々その學校に於ては歴史の授業でありまして、先

生が生徒に向つて云ふには「獨逸は今日非常に困難な境遇にあることは諸君の知つてゐる通りである。ついてはこの窮乏は今日を以て究極であると考へるか。今日がどん底であるかどうか。換言すれば獨逸は明日からよくなつて行くかどうか。」とかういふ問を發したのであります。所が生徒は一人として答へるものがなかつたそうであります。そこで先生自身之に答へて謂ふには「自分はそうは思はない。今日は非常な窮境にあるにはあるが、明日はもつと惡くなるであらう。明後日は尙一層惡くなるであらう。之は何故であるか。凡そ一國の興隆せんが爲には、全國民の心が一つに結ばれて勇躍國家中興のことに當らねばならぬ。百年前、獨逸が再び復興出來たのは、偉大なる哲人フイヒテがあらはれて、彼の力によつて全獨逸人の魂が一つに結ばれ、鋭意再興の業に從つた爲である。この事實より、更に轉じて今日の獨逸を見よ。何處に全獨逸國民の魂が結ばれてゐるか。偉大なるフイヒテは何處に見ることが出來るか。フイヒテ再び現れず、全國民の心がばら〳〵になつて居る今日、我國は衰亡の一路を辿るのである」と。私はその日の夕方、この話を聞いて大いに驚きまして實に素晴しい先生が居ると云ふ事を痛感したのであります。

この言葉の意味は殊更附け加へて云ふことはないと思ひますが、この教師の言はんとする所は、その口に表はれて居ることゝは全く反對なのであります。即ち獨逸今日の困窮は非常なものであるけれども、お前達は決して悲觀してはならない、我々全獨逸國民が、フイヒテを指導者として、一つの精神に結ばれて起つならば、政治に、經濟に、外交に、教育に、獨逸を再び世界の大强國とすることは、決して困難なことではない。如何なることがあつても悲觀してはならぬ、そして速かにフイヒテに還れと、かう云ふ意味なのであります。それを先生は母親の如きやさしき言葉

を以てせずして、父親の嚴然たる言葉を以て、生徒の魂に投げつけたのであります。これはまことに驚くべき思想家であり、且教育家であると私は大變感心させられた次第であります。私はフイヒテの書物も相當讀み、その思想も知つて居りましたが、こゝに於て始めて偉大なるフイヒテの精神を感得し、且獨逸魂なるものに現實に觸れることが出來たのであります。

フイヒテに就ては御承知のことでありませうが、百年前ナポレオンの軍が潮の如く獨逸に侵入し、プロシヤ國王の如きはベルリンを逃れて邊境を彷徨ひ、獨逸は殆ど滅亡したかの如く思はれし時、ベルリンに於て窓の下を通るフランス軍の進軍喇叭に妨げられながら、十數回に亘つて講演をなしてゐます。それが彼の有名なる「レーデン・アン・デ・ドイツエ・ナチオン」(獨逸國民に告ぐ)であります。この講演があれ程迄苦境に陷つた獨逸の復興原動力となつたのみならず、現時の復興の原動力となつて居るのであります。そのフイヒテの講演の內容は、勿論一々申上げることは容易ではありませんが、玆にその眼目として三つの點を擧げようと思ひます。

第一には、「獨逸は今や潰滅崩壞に瀕してゐる、此の獨逸を滅亡に瀕せしめたのは一體誰の罪であるか。」と云ふ事を最先きに提げて起つて居る。而してフイヒテは自らこれが解決を與へて曰はく、「其の誰の罪でもない、獨逸人自身の罪である。獨逸人自身の飽くことを知らざる利己心の增長、これが遂に祖國を滅亡にまで迫ひ込んだのである。」と。

第二に、「此の國家の危急を救ふ爲に何物の力を賴むべきか。」又自ら之に答へて曰はく、「何物の力をも賴むべきではない。如何なる人、如何なる偶然の機會、如何なる神の力をも賴むべきではない。賴むべきは只汝自の力である。」と。

最後にフイヒテが提げて立つたのは、「然らばどうしたらよいか、何を爲すべきであるか。」と云ふ問題であつた。フイヒテ自ら之に答へて曰はく、「此に對しては外でもない、獨逸人が眞の獨逸人になる事である。我々がほんとうの獨逸人にさへなれば、總ての問題は忽ちに解決するであらう。」と。これが結論であります。

此のフイヒテを指導者として、全獨逸人が眞の獨逸人たらんとした事が、往時の獨逸を奮ひ起たしめたのであり、又百年後の今日、世界大戰後に於ける慘憺たる辛苦の結果再び、フイヒテを指導者として眞の獨逸人たらんとしつゝあることが、兎も角も獨逸の現在興隆しつゝある原因であります。而して是を單に外國の出來事として、獨逸興亡の歷史を觀察すると云ふ事のみに止まらしめずして、轉じて我國の現狀を觀察しようと思ひます。

フイヒテの思想は驚くべきほど東洋的日本的なものであり、寧ろ獨逸人と云ふよりは、日本の哲人の言葉として相應しいものがあります。その結論として居る處も、我國の先哲の言葉に觸れるが如き感じが致します。卽ち我々としては、一切の問題を解決する基礎として、我々自らが眞の日本人になることを考へねばならぬ。日本の現狀、內外極めて重大なる事は御承知の通りでありまして、これが解決の爲に幾多の方法がありますが、其の根本は 皇國日本の確立と、我々日本人が眞の日本人になると云ふ事に存するといふことを、深く思はねばならぬのであります。斯樣に一口に言へば、極めて簡單容易であつて、我々は現に日本人である、もう問題はないではないか、と云ふ風に考へられ易いのでありますが、實際は決してさうではないのであります。東京帝國大學に於て、哲學を講義せられた先生の中で忘れ難い人に、外國人ではありますがケーベル先生があります。このケーベル先生は非常によく日本を愛し、日

本を理解された外國人の一人でありますが、先生がかういふ事を言はれて居ります。「純粹の日本が消えてなくなる日ももう遠くあるまい。恐らくは片田舍の村に於て鍬をとる百姓、又邊鄙な島々において網をうつ漁師、そういふ所にはまだ本當の日本といふものが殘つてもゐやう。併し乍ら、大抵の所では、特に都會に於ては、俗惡な西洋の物質文明が、「俗惡なり。」と云ふ人自身は西洋人であります。高貴なる日本の精神文化を悉く打ち壞してしまつた。純粹の日本が、消えてなくなる日ももう遠くあるまい。」と云ふのでありますが。此は物好きな一外人の偏狹なる言葉として捨て去ることは出來ません。先生は永らく哲學の講義をされたのでありますが、此の間に於て知り合つた學者の中に、たゞ三人の學者を擧げて、此の三名の人に會ふ時は眞の日本人に會つた感じが與へられるが、其他の人は凡て似而非物と云ふ感じしか與へられなかつた、と言はれて居ます。實に辛辣な批評を加へられたものでありまして、此の批評の如きも外人の偏狹な言葉として、等閑に附する事は出來ません。之を味へば、誠に深い感銘を與へられるのであります。

我國は明治五、六年以後に於きまして、あらゆる方面に急角度の轉回が行はれ、政治、經濟、敎育、宗敎、將又家庭に、日本の正しい傳統は次第に薄らいで來たのであります。斯くの如き俗惡な社會に多年生ひ立ち、その敎育を受けて來てゐる我々の氣持の中には、何時の間にか日本人らしくない精神がたくさん入つて居るのであります。私は少年にして志を國史に立てまして、長らく國史の研究に從つて來た者でありますが、お恥しい事ながら、顧れば私の懷いてゐた考の中に、多くの日本人らしくないものがあり、反省しては日に一枚を脫ぎ、月に一枚を脫ぎつゝ來たので

ありますが、まだ本當に日本人であるかどうかを常に反省せねばならない有樣であります。日本の正しい傳統が無視せられた例に就いて申上げますと、明治五年、後の文部大臣子爵森有禮が、辨務使として米國に在りし時、その文明を見て驚嘆し、日本の野蠻な狀態は一日も早く捨てゝ、歐米の高い文化にまで向上せしめなければならないとして、其の手段を考へた揚句に、日本語を全廢し、法律を以て强制して、全國民に英語を使用せしめるのが、最も近道であると考へ、之を本國に建白する前に、エール大學の言語學教授プロフェッサー・ホイットネー氏に相談したのであります。此の時に於けるホイットネー氏の答は實に感謝すべきものでありまして、次の如くであります。「日本が其の先祖傳來の言語を棄て去つて英語を採用するといふ事は、日本が國家の獨立を拋棄して、英米の屬國になる事を覺悟せねば出來ない事である。自分は日本人に對して斯くの如きいまはしい事を勸める事はどうしても出來ない。」と言つて拒絶されたのであります。當時日本に同情を持つて指導して呉れた幾多外國人の中に、ホイットネー氏の如きは眞に感謝に堪へない人であります。此の一言によつて、森有禮は日本語全廢の案を徹回したのであります。これは一例に過ぎませんが、斯くの如く日本本來の傳統は無視せられて來たのでありまして、森子爵の當時の手紙の中、北海道開拓使黑田氏に宛てたものを、先年北海道廳に於て見たのでありますが、全部英語で書かれてあります。今日より見れば笑話であり、茶話としてすむのでありますが、實際斯くの如き不見識極まる事が、各方面に亙つて行はれ來つたのであります。

玆に於て、深く檢討を要することは、我々は先祖の正しい傳統を踏んでゐるかどうか、　皇國の社會、　皇國の學術、　皇國の教育、是等が總て眞に、　皇國のものとして、眞に日本の傳統に生きてゐるものであるかどうか、といふ事であります。これについて十分の檢討を加へることなくして、唯眼前に横たはつてゐる問題に對して、自分一個の才智を以て解決せんとするならば、一應は解決されるかに見えても、實際は一層の紛糾を招くのみであります。皇國内外重大の時に際し、非常なる努力を必要と致しますが、其の根本は自己の小智小才を働かすことなく、幾千年の傳統に蘇ることであります。我々自らが眞の日本人になり、我々を眞の姿に歸し、各方面に亙り眞の日本の姿を實現する外に解決の道は斷じてないのであります。

先にフイヒテの言葉を聞きましたが、獨逸に於ける獨逸人は眞の獨逸人になればよい、と云ふ言葉を、その儘我國にあてはめれば、日本人全部が眞の日本人に還ればよい、と云ふ事になるのであります。今之に就いて申上げたい事は多々ありますが、最も簡單明瞭に、眞の日本人の姿はかくあるべきものである、といふ事を説明致したいと思ひます。そのために私は、眞の日本人の典型であると崇敬致しております、佐久良東雄先生に就いて御考を願ひたいと存じます。

先生は私共の觀ました範圍に於て、最も美事な眞の日本人であると考へるのであります。昔ギリシャの哲人は白晝燈火を持つて町を歩き、人が不思議に思つて、「何をしてゐるのか。」と尋ねますと、「人を探してゐるのだ。」と答へたといふ話があります。此の一言は實に味ふべき言葉でありまして、此の哲人の探してゐた人は、單なる人ではなく、人の中に於ける眞の人、極めて深刻なる意味を持つものと解せられます。これを理解せんがためには、男の中の男と

云ふ言葉を考へますれば明白であります。「天野屋利兵衛は男でござる。」と言つた、その男といふ意味は、女性に對する生理的な男性といふが如き淺薄な意味ではなく、典型的な男、男の中の男一匹であるといふ意味であります。かくの如く男の中に男あり、人の中に人ありと云ふ意味に於て、日本人の中の日本人として考へられる人物が歴史上幾多あるのでありますが、その中におきましても先生の如きは特に美事なお方であります。

先生は實に不幸な生涯を送られた方でありまして、最近まで先生の名は世間に忘れられて居たのであります。單にその事蹟が忘れられ、また其名が忘れられてゐたばかりではなく、先生がなくなられた狀況すらも、明瞭でないのであります。先生は櫻田門外の事變直後、大阪に於て幕吏に捕へられ、江戸に護送される途中に於て殺されたとも言ひ又江戸に着いた後、傳馬町の獄屋に於て斷食して亡くなられたとも言はれてゐます。其死期の如きも、遺族にさへ長らく經つてから漸くわかつたと云ふことであります。明治初年大阪に先生のお墓が建てられたのでありますが、後になつて心なき人々により、あちらこちらと移されて、終に生國たる常陸に移されたのであります。けれども不幸なる長き歳月の後に、心ある人々により先生の魂は今日再び復活して大阪の地に歸つたのであります。此の先生に就いて純正なる日本人とは斯くの如きものであると云ふ事をお考へ願ひ、われ〳〵がまことの日本人たらんとつとむる時に於いて、目標とせねばならぬと思ふのであります。

先生は文化八年常陸の國に生れ、九歳の時寺に入り、觀音寺の康哉の弟子となり、僧侶として立たれたのであります。此の康哉といふ人は立派な人物でありまして、深く契沖阿闍梨に私淑して、一生を萬葉集――御承知の如く、萬

葉集は未だ外國文明に蝕まれざる時代の、日本人の心を卒直に詠つた歌集でありまして、純正日本人の氣持が實によく現はれております――の研究に從事して、日本の正しい姿を明らかにせんと全力をあげられた人でありまして、世間の人々から萬葉法師といはれた方であります。

やがて年長じて眞鍋の善應寺の住職となられました。眞鍋と云ひますのは土浦の町外でありまして、少し山手にかゝつた所に善應寺があります。然るに師匠の教を受けて萬葉集を研究し、更に進んで日本の古典を段々と研究されます中に、先生は痛切に感ぜられまして、「佛教は印度の教であつて結局日本の正しい教とは違つたものである。」と悟られたのであります。そこで或日の事、檀家をお寺へ集められ、御堂の前に火を焚いて云はれるには、「自分は今日迄は僧としてやつて來たが、感ずる所あり、今日限り佛教とは縁を絶たうと思ふ。」とて火の中に袈裟衣を投げ入れて、燒いてしまはれました。江戸時代に於て日本精神を自覺された人は澤山ありましたが、この人の樣に自ら佛門にあり一寺の住職たる人であつて、しかもこれは正しい道ではないと氣付かれ、それを脱却せられると云ふ事は、非常な勇氣と叡智とを必要とするのでありまして、實に驚嘆に堪へない所であります。還俗して寺を去られると、先づ鹿島神宮に參拜せられ、社前に於て祓をして身を清め、神の御前にて眞の日本人に立ちかへり、佐久良東雄と名乘られたのであります。「佐久良」は櫻のサクラであります。櫻を時代時代に如何に觀るかに就いて、二千年三千年の沿革を申し上げることによつて、如何に眞の日本の姿が失はれてゐるかと云ふ事が分りますが、時間がありませんので今それを委しく申上げられないのは遺憾であります。歴史を通觀致しますと、日本人が眞の日本人の姿である時は、櫻の花は

全國民の感激の的となり、反對に外國思想に心がとらはれ、傳統の忘れられた時には、櫻は捨てゝ顧られず、遂つた花がもてはやされて居ります。古代に於ては花と云へば櫻の事を云ひました。木花咲耶姫と云ふ神樣がありますが、木花も咲耶も共に櫻の花のことを云ふのでありまして、咲くと云へば櫻の花が咲くことであり、櫻の花こそ花の中の花として、我々の祖先が喜んだのであります。所が時代が降つて平安時代の中頃以後に於ては、國民は支那文化に陶醉し、花と云へば梅の事を意味する樣になつたのであります。

天神樣の畫像に手に持たれて居るのは梅の枝であります。菅公は御承知の通り非常に梅花を愛されて、「東風吹かば匂おこせよ梅の花」と、詠はれたのは御承知の通りであります。梅花に對する感激は、支那傳來のものであつて、日本本來のものではなく、ウメのウは接頭語で意味なく、メは支那語の梅(メイ)に通ずるのを見ても分明であります。梅は日本にもあつたのでございませうが、古代に於ては殆ど人々の注意を引かなかつたのであります。これが喜ばれたと云ふ事は、平安末期に於て日本文化の傳統が失はれて來た事を明らかに證據立てるのであります。小野篁が遣唐副使として派遣されんとした時、海路の危險を慮つて成るべく安全な舟を奪ひ合ひ、遂に隱岐へ流されて居ります。當時の問題として其の他色々の實例がありますが、要するに日本人の氣持の中に如何なる艱難も押し切り、如何なる怒濤をも恐れず進むと云ふ純正日本精神がくだけて、遂に鎖國の狀態に萎縮してしまつたのでありまして、その風潮がやがて花と云へば梅となつたのであります。其の後、幾多の變遷を經ましたが、再び櫻が國民全體の喜びの的となりましたのは、實に江戸時代の中頃からであり、かの有名なる本居宣長先生の、「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ

山櫻花」と云ふ名歌は、此の時代の櫻に對する感激を代表するものであります。然るに今日に於きましては、明治の末期或は中期以後、再び人心は櫻を去つて了ひました。現在もてはやされるのは決して櫻ではなくして、西洋の草花であります。青年子女の詠ふのは、フリーヂヤ・チューリップ・ダリヤ等殆ど西洋の花であるのを見ましても明瞭であります。此の事は些細なことの樣でありますが、非常に重大な事であります。處が佐久良東雄先生は櫻の花を以て自分の姓とせられ、又東雄を名とせられました。東雄も亦極めて力强い意味を持つて居りますが、特に佐久良の姓を見れば、先生の心が如何に純乎たる日本人に歸つて居たかが分るのであります。ところでこれに就いてお考へを願ひたいのは、櫻の花を愛する先生の心持、乃至は古人の櫻の花に對する感激は、單にその美しさに對してゞはありません。ケーベル先生の言葉に、「櫻の花の頃こそ、日本人を觀察すべき時である。これその牧歌的、哀歌的なる天性の、最も明らかに現れる季節だからである。日本の國民的花は、堅い硬ばつた魂なき萎むを知らざる菊ではない。絹の如く柔かなる華奢なる、芳香馥郁たる短命なる櫻花こそ實にその象徴である。日本人は此の美しき花の束の間に萎み、そうして散り行く其の中に、わが生の無常迅速の譬喩と我が美と青春との果敢なさを見るのである。櫻の花を見て居る時には、春の唯中に秋の氣分が我が胸に忍び入る。」云々とありますが、その言ふ心は、日本人の櫻を愛するのは、繚亂の美に對する陶醉にあらず、うるはしさに對する憧れでもない。其の美しく咲いてゐる櫻花が一度嵐に吹かるゝ時、何の未練もなくいさぎよく一時にさつと散つてゆく、その散り際に對し無限の喜びを感ずると云ふのであります。卽ち古人の櫻に對する氣持は皆そうであつて、我々の先祖が胸ふるふ迄の感激は、大丈夫亦櫻の如く潔く散つて

行かうと云ふにあり、これが日本人の櫻を愛する態度であります。玆に西洋の草花に對する氣持と、全く異つたものを見るのであります。外國から來たものは何でも彼でも拒否すると云ふやうな氣持ではなくして、パッと散る潔い姿が、男としての性質にしつくりと合ふのを喜ぶのでありまして、意味は極めて深刻で、西洋人共の到底理解し得ない處であります。

扨、東雄先生は佐久良東雄と名を變へ、此れより後益々日本精神の徹底を期せられたのであります。日本精神と云へば、近時種々の言説を見るのでありますが、その極致を簡單明瞭に申し上げますれば、それは忠孝にきはまると申してよいと思ひます。その他の事は色々ありますが、大眼目ではありません。

山崎闇齋先生と云ふお方は、佐久良東雄先生よりずつと以前、今より二百五十三四年前の人で、元來禪宗の坊さんでありましたが、後儒教に入られ、更に神道に轉ぜられ、眞に日本精神に復歸せられた方であります。佛教を捨てられた意味は、佛教は自分の死後極樂に行つて自分丈助かりたい爲に、親もかまはぬ、主君もかまはぬ、世の中の一切を捨てゝ省みないから、どうしても日本人として承知出來ない、と云ふにありました。かくて廿五歳の時、佛門を去つて儒教に入られたのでありますが、又儒教を否定されたのであります。それは、儒教に於ては、湯武の放伐を是認して居るからであります。即ち殷の湯王は、夏の桀王が惡逆無道にして、人民困難して居るのを見て之を放ち、殷の國を始めたのであります。然るに湯の子孫に紂王があつて、これ亦國民生活を蹂躙し、爲めに武王之を征伐し、自ら天下を取つて周と號しました、之は支那歴史上に於て、最も重要なる問題でありますが、儒教は之を是認して居るの

であります。孟子梁惠王下篇に、

「又齊宣王問曰、湯放レ桀武王伐レ紂有レ諸。孟子對曰、於レ傳、有レ之。曰、臣弑二其君一可乎。曰、賊レ仁者謂之賊一、賊レ義者謂二之殘一、殘賊之人謂二之一夫一。聞レ誅二一夫紂一未レ聞レ弑レ君也。」

徳なき王は匹夫である。匹夫を征するは當然のことである、と云つてゐるのであります。これに對して、闇齋先生は、如何なる事あるも臣下として君を弑することは絶對に許されない、此の道にして不明なる時、一切の道徳は崩れて了ふのである。即ち日本人の道としては、　君に如何なる事あるも、臣としては絶對の忠義を盡す外はない、としまして敢然として儒教を捨てられ、純乎たる日本精神に立ち歸られたのであります。

先生が　君に對する絶體忠を講義される時は、刀の下緒に手が掛かつたと云ふ事であります。之はどういふことかと云ひますと、假令　君が惡逆無道でありましても、之を怨み奉らない。是が即ち臣たる者の道であるとするならば、今此の原理を以て今日の政治を批判するとどうなるか。如何なる理由があるにもせよ、幕府が　天皇の大權を盜み奉つて擅に天下の政治を行ふと云ふ事は、どうしても許すことは出來ない事である。玆に於て君臣の大義より論ずるならば、天下の政治は　上御一人に奉還しなければならぬ。即ち幕府は之を倒さなければならぬ。刀に掛けても幕府を倒して、再び　天皇御親政の御代に戻さなければならない。此の考へから刀に手が掛かつたのであります。論者或は言ふであらう。天下亂れて國民塗炭の苦しみを受けたが故に、德川家康が覇道を以て救つたのであると。然しこの論は日本人として絶體忠の根本的立場より見て、到底許容する事は出來ないものであります。

闇齋先生がかくの如く論じましたのは、德川幕府全盛の時代、卽ち三代四代將軍のときのことであります。而してその精神は脉々として門人の間に傳はり、二百年の後、維新の大業に於て、身を以て皇事に盡された志士の殆ど大部分は、先生の門下であります。山縣大貳は江戸城の燒討を策して死し、竹內式部は公卿に勤王を說いて三宅島に流され、高山彥九郎は　皇室の御式微を悲憤慷慨して筑後に腹を切り、唐崎常陸介亦微力爲す處なきを慚きて自刄し、梅田雲濱は妻を病床に殘し飢に泣く子を捨てゝ大事に趣き、橋本左內は二十五六歲にして驚くべき雄大なる國策を提げて起ち、遂に井伊大老に殺されたのであります。是皆山崎闇齋先生の門流であります。

處が此の頃譯の分らない唯物史觀により、明治維新を曲解し、維新は經濟政策の行き詰りより、自然に幕府が倒れ、所謂近世資本主義となつた、との思潮が橫溢して居りますが、之は明治維新が以上の如き經緯を辿り、眞に倫理道德の根本より發して居る事實を把握して居らず、全くの誤解であり、嚴然たる事實を無視して居ると云はなければなりません。

この闇齋先生の作られた詩に、「學問他無し、忠と孝。」とありますが、之こそ崎門學の根本精神であつて、又明治維新の根本動力となつたものであります。われわれが先哲と仰ぐ方々の學問と云ふ學問悉く玆に歸着するのであります。之が佐久良東雄先生に如何に顯はれて居るかと申しますと、先生の手紙の中に「その故は忠孝の二つより外は道はなきことにて云々」道と云ふものは忠孝の二つにきはまる。かう云つてゐられるのであります。また先生の歌に、

君に親にあつて仕ふる人の子の
寢ざめはいかに淸くあるらん

とありますが、その意味は、功名に驅られて何等かの機會を把へようと覘つて居る人は、寢覺めも安らかであるまいに、眞に忠孝の大道を踏んで居る人は、常に心淸く、明るく、夜の寢覺めも安らかであらうと云ふのであります。之は山崎闇齋先生と全く同じ精神でありますが、佐久良先生の學問は、又山崎闇齋先生と密接な關係があつたのであります。卽ち佐久良先生は天保十三年に平田篤胤先生の門に入つてゐられますが、この篤胤先生におきましては、國學の傳統と、闇齋先生の崎門學の傳統とを融合して居るのであります。かくて佐久良先生の學問は、崎門學と一脈相通ずるものがあり、學問が忠孝に歸着するとなす點、全然の一致を見るのであります。

然し忠孝の二つを忠と孝の二つに考へるのは、未だ眞の日本精神に徹した者とは云へないのでありまして、更に一歩を踏み破らなければならない。而して更に一歩を蹴破つて前進すれば、この二つは忠の一字に歸するのであります。之は何でもない事のやうでありますが、此の問題は日常直面する重大な問題であつて、實際に於ては此の事の分らない場合が非常に多いのであります。今國家非常の秋に際し、「自分には親がある、親を捨てゝ國事に奔走する事は出來ない。」等と躊躇して居るうちは、未だ此の忠の一字の境地に達して居ないのであります。かゝることは軍人の方々には申すまでもないことでありますが、文官の方面には屢々遭遇する問題であります。忠孝が分散して居る中は、忠孝の二字も何等の意味もない、又これを一つにまとめて孝とのみ考へます時には往々重大なる誤りに陷りやすい、「忠なれば孝也。」是が日本國體の眞に有難い處であります。山崎闇齋先生の學統をうけ繼がれた橋本景岳先生は、僅

か廿六歳にて殺された方でありますが、人物識見、史上稀なる偉大な人でありますが、その先生の詩に、「十歳鍛成忠一字。」とあります。刀に菊一文字と云ふのがありますが、實に景岳先生は忠一文字を鍛錬せられたのであります。先生は十五歳にして志を立て、二十五歳にして獄に投ぜられ、二十六歳の時に死なれたのでありますから、十歳と申しますのは全生涯であります。その全生涯を通じて、鍛錬されたのは唯忠の一字でありました。かくの如く忠孝の二字は、究極する所、忠の一字に歸するのであります。

これに就きまして尚一つ御考へ置き願ひたい事は、「恩」と云ふ考へであります。「恩」と云ふ思想は、西洋にも全く絶無であるとは申しませんが、西洋人には極めて稀薄なもので、彼等は「恩」を考へる前に、「權利」を主張するのであります。人の權利と云ひ民の權利、將又子の權利としておしたてるのは、之れ西洋流の考へであります。恩と云ふ考は東洋的の思想であり、權利は西洋的思想なのであります。所が現在の日本は如何と云ふに、大正より昭和にかけて社會の動きは恩と云ふ事は考へられなくなつたのであります。あらゆる勞働爭議、學校騷動等、人々の主張する所は皆權利であります。現在の日本人が、既に西洋思想に災されてゐると云ふことは、この一點より考へて非常な深刻なものがあることを知らねばならぬのであります。本來東洋人は權利を考へる代りに恩を考へた。ところが同じ東洋に於ても、恩の思想は所によつて異ります。印度に於ては四恩、即ち君恩、親恩、師恩、社會恩と云ふのであります。是は佛教に於て屢々云ふ所でありますが、この考へ方は日本の考へ方と格段の相違があるのであります。

即ち印度思想に於ては、恩を四つに分散してゐるのでありますが、日本思想に於てはどうかと云ふに、吾等が親の恩を考へる時、更にさかのぼつて親を育ませらるゝ　大君の恩を思ひ、究極する所之を　君の御恩に歸し、或は社會の恩を考へても、その社會は　大君の御蔭によつて成立つて居るものと考へて、是亦歸する所　君の御恩となすのであります。これが即ち純正日本精神の、他の思想と違ふところであります。即ち日本に於てはすべて　大君の恩に歸着するのでありまして、この御恩の爲に命を捧げる、是即ち忠と云ふのであります。佐久良先生が幕吏の追究急にして何時捕へられるか、何時殺されるか分らない時に書かれた遺書に、

我等先祖ヨリ
皇恩神恩何萬年今日迄受候ヤ數ヘガタシ、此處ヲヨク〳〵勘ヘ明ムレバ、此一身幾度ステ、御恩報ジ候トモ報ジ難シ、實ニ九牛ガ一毛ニモタラヌコト也、ヨクヨク此意ヲ勘明メ、スハヤ、御大事ト申セシ時ハ一命ヲ棄テ、報イ奉ルベシ。然ラザレバ吾子孫ニアラズ、云々。

と書き出されてあります。即ち我々臣民は、幾萬年　陛下の御恩　皇室の御恩を受けてゐるか分らない。之が爲に、何度死んでもその御恩の萬一にも報ひ奉ることは出來ないのであつて、一旦緩急の場合に、死んで　大君の爲に盡しまゐらするは當然の事であると云ふのであります。これ全く純乎たる日本人の素直なる心持であります。玆に先生の精神の根本が明らかになつてゐるのであります。之はきまりきつた事の樣に考へられるかも知れませんが、概念的に之を知つてゐる人と、この精神に生きてゐる人とは、日常の行動の上に非常な相違が出來てゐるのであります。之が先生の場合、如何に現はれてゐるかと申しますと、幾多の逸話があります。或る時の事であります。藤田東湖先生が

佐久良先生に非常に敬服されまして、水戸家に仕官を勧められました所が、先生は「私はもはや主人をもつて居ります。今更外へ仕へることは出來ません。」と云つて辭退致しました。東湖先生は不思議に思はれ、「御主人はどちらの藩でありますか。」と尋ねました。その時の返答は實に美事であります。即ち先生は容を正して左の如く申されたのであります。

「申スモ恐レ多ケレドモ京都ニマシマス
天孫今上皇帝コソ東雄ガ御主人ナレ。」

流石の東湖先生も、全く二の句がつげず、深く恐縮せられた、と云ふことであります。この言葉の中に、先生の純なる日本人としての自覺の徹底せることが明瞭に現はれて居ります。又先生が京都に上られる途次、伊勢に於いて足代弘訓を訪ねられた時、弘訓が硯箱を持ち來り「是は忝けなくも　陛下より賜つたものである。」と云つて示しましたところが、佐久良先生は「およそ我々の持物は、何一つとして　陛下より賜つたものでないものはない、然るにこの硯箱のみを、御賜物として示されるのは心得ない事である。」と申されたのであります。此の一言こそは純正日本人の精神でありまして、その深刻透徹せるに驚嘆せざるを得ないのであります。この物は俺のもの、この土地は俺の所有權がある、この財産は俺の財産だ等と云ふのは純正日本人の考と大いに相違するのでありまして、　陛下の御惠によつてこの土地はしばらく自分に貸し賜つた土地である、又　陛下の御惠みによつてかうして着物を着せて戴き、毎日御飯を食べさせていただくのである、と云ふ考こそ、眞の日本人の精神なのであります。

承久の變に於て、北條泰時が、三上皇を島々に御流し申上げた時、栂尾の明惠上人が泰時を難詰して、「凡そ天下の物、何一つとして　陛下の御物ならざるはない、我々の生命と云ふも自分のものではない。從つて　陛下よりお召のある時は、これを御斷り申上げる筋合はない。然るに貴方は大軍を以て京都を攻め、　三上皇を捕へ奉り、之をお流し申し奉るとは何事であるか。」と申してゐます。明惠上人が素晴しい人物であると云ふことは、この言葉の中で明瞭でありまして、「夫一朝の萬物は國王の物に非ずと云ふことなし。」の考へこそ日本精神の根本であります。玆に西洋風の考へ方と、大なる差異があるのであります。佐久良先生の純乎たる精神も全く此處に發ずるのであります。而して忠義を以て最高の道德となし、天下のものすべて　陛下の御物であるとするも、かゝる考が單に理論に止まり、概念に止まると云ふのでは十分でありません。これは崎門に於て特に力說せられたところであります。學問は必ず實踐を待つ、實行實踐を伴はざる限り、單なる概念的遊戯にすぎず、道を求め、道を把握したものとは云へません。之が實際の行動に發してこそ、眞の日本精神となるのであります。この點明惠上人の態度は尙不徹底と云ふべきでありまして、あの場合何故泰時を即座に刺さなかつたか。この點、如何にしても上人を辯護する事は出來ないのであります。あの時代に於て、あれ程大義を辨へておられた事は、實に偉いのでありますが、しかし爲すべきをなしてゐないのは何と云つても遺憾であります。今佐久良先生はどうかと申しますと、先生に於きましては、忠義は決して概念のみに止まつては居りません。道德を直に實踐に移されて居ります。天保十一年の暮に、光格天皇が崩御遊ばされました。其の當時の狀態として、將軍逝去の場合は忽ち全國津々浦々に知れ亘り、服喪も極めて嚴格であつたのであります。

之に反し一天萬乘の　大君崩御の節は、國民の多くが之を知らず、先生が鹿島神宮にお詣りになつた時、そこですら崩御の事を知る人がない。之に對して先生の純正日本精神は、慨嘆已むに已まれなかつたのは當然であります。

「御崩御候ても天下國民のうちしらざる者多くしる者すくなくすでに先日、鹿島へ參り候處時隣杯の人さへ一向不知趣、此之日本國惣鎮守の根しめの御場所にてさへ左樣之事鳴物停止之事もやう〳〵五日位臣下之鳴物御停止は幾日ともなく長くたれしらぬもなくまひしく　御主君ハ死生ともに

日本國　御主君ノ位ニおはします　御主君さへ御主君の位におはしまし候へハ余のなけきハいかなる事も心配するにたらぬ事にて夫ニ付てもた〳〵よの中ヲ無味氣ノミ存候彼程ナル無味氣よにハすますとも有なんとノミ存候事ニ御座候」

然るにかくの如き感激は、不幸にして現代においては一般に失はれかけてゐます。今眼を轉じて最近の日本の狀態を見るに、大正より昭和にかけて全國に湧き立つところのものは、工場或は農村の勞働問題にして、換言すれば、自己の生活に關することに他ならず。自分の俸給の少きを嘆き、己の勞働の多きをのみ訴へる有樣にして、未だ　御主君の　御主君たるの御位にいまさざるを嘆くを聞かないのであります。今日の時代を觀るに、日本人の總ては己の經濟的問題のみ沒頭し切つてゐる有樣でありまして、今日こそ後世史家の嚴密なる批判を逃れることは出來ないのであります。之は實に驚くべき問題でありまして、唯自己の利益經濟的な事柄に沒入しきつて、更に最も重大な問題に對しては全く無關心であるといふ事に、非常に大きな危險が存してゐるのであります。

佐久良先生は　光格天皇の崩御に際し、非常に悲しまれ、之を色々手紙や歌にあらはされて居ります。

『わが日本國之　御主神（これは初め御主人とかき後に御主神と改められました）無勿體かたじけなくも、草木禽獸もいかなる天地のはてのえひすくにも少しのまも御恩蒙らさる物やハアル。無勿體カタシケナクモ天照大御神之日繼之御子ニ坐て高御座ニ大御坐て天下しらしめしし、前の天皇御崩御式之事共ニ付いらぬ賤の男が事ナガラ太古よりの御式ナトふるきふミともよりさくり出しミ候處たゝやけノミおき候而世間ヲ見候もいやになり云々』

先生の御恩といふ思想は、こゝにまことによく現はれてをります。先生は　陛下の崩御に對し奉りての一般國民の態度を見るに、日本國が正しき日本國なりし往時と比べて、今の世相は何といふことであるか、臣子の分として見るに忍びないとし、斯くて最早世間とはつきあはず、唯一人考へて行かうと決心せられたのであります。又當時に於ける　大君の御有樣を拜察し奉りて、

「禁中の花」と題して

をぐらやまよしのゝはなはいかにぞと
　　みはしのさくらみそなはすらん

陛下が、小倉山や吉野山の櫻はどんなにか美しいことであらうと御思ひになつても、幕府の監視嚴重の爲、宮中より一歩も外へ行幸[illegible]ることは御出來にならない。そこで、　陛下はやむを得ずして吉野の櫻を遙かに御想像遊ばさ

ながら、宮中の花を眺めてゐらせられることであらう。誠に臣下として悲しくも亦、畏れ多き次第であると、嘆かれたのであります。先生更に詠まれて、

花見にといでますみよの春ならば
　こもりをるともうれしからまし

御上が何處へでも御出まし出來る御代であるならば、我々風情の者が家の中に籠居して居ても、どれほど嬉しいことであらう、との意味であります。これは實に感慨深い歌であります。かくの如く　陛下には御自由に行幸すら御出來にならない狀態を袖手傍觀することは、日本人として斷じて出來ないといふので、先生は一切を顧ず、萬難を排して　皇政復古の大義を遂行しなければならぬ、と考へられたのであります。先生の歌の中に、

いまに見よ高天原に千木高知り
　瑞の　皇居(みやこ)つかへまつらむ

今は　御所は實に貧弱なる御造であるが、今に見よ、幕府を倒して高天原にまでとどく堂々たる宮城を造つて差上げねばならぬ、との赤心であります。かく考へて先生が　皇政復古の大事業に向はんとした時、目標とされ、模範となつたのが楠公であります。先生の遺書に、

「カナラズカナラズ學者ニモ、詩人ニモ、歌ヨミニモ、何ニモ成レト思フ事狂人ノ心也、唯々楠正成ノ尊ノ如キ忠臣ニナラウト一向一心ニオモフヘシ、思テ修行スヘシ」

このところに於て先生の學問が現實に足を踏みしめて居られること、單なる概念の遊戯に止まらず、直に足を踏み出して居られることを考へねばなりません。それからこれは詳しく申上げる必要もありませんが、明治維新の際の志士といふ志士は、皆楠公を目標として之にならはんとせられたのであります。志士のどの人物を促へて言つても皆そうであります。然るに驚くべき事は、此の精神は明治維新後、七、八年にして、漸く崩れ始め、明治七年頃に至り、明白に高氏を以て大人物、すばらしい人物と考へる思想が現れ、之が一世を風靡して、以て今日に及んだのであります。先年ある商工大臣が、高氏禮讃の問題を引き起した事がありますが、我々から見れば、之は決して例外ではなく、明治、大正、昭和にかけての世間一般の風潮の一端の現れに過ぎないのであります。實に高氏を禮讃する者は、現在の高位高官を始め青年學生に至るまで、滿ち滿ちて居るのであります。而してその由來する源は福澤諭吉でありまして明治七年三月の印刷にかゝる學問のすゝめ第七編には最も口汚く楠公を罵り、楠公の湊川戰死は、權助の首縊りと何等異ならざるを論じて曰く、

「古來日本にて討死せし者も多く切腹せし者も多し何れも忠臣義士とて評判は高しと雖も其身を棄てる由緣を尋るに多くは兩主政權を爭ふの師に關係する者歟又は主人の敵討等にて花々しく一命を拋たる者のみ其形は美に似たれども其實は世に益することなし己が主人のためと云ひ己が主人に申譯なしとて唯一命をさへ棄てればよきものと思ふは不文不明の世の常なれども今文明の大義を以てこれを論ずれば是等の人は未だ命のすてどころを知らざる者と云ふ可し元來文明とは人の智德を進め人々身躬ら其身を支配して世間交り相害することもなく害せらるゝこともな

く各共權義を達して一般の安全繁昌を致すを云ふなりされば彼の師にもせよ敵討にもせよ果して文明の趣意に叶ひこの師に勝てこの敵を滅しこの敵討を遂げてこの主人の面目を立てれば必ずこの世は文明に趣き商賣も行はれ工業も起りて一般の安全繁昌を致す可しとの目的あらば討死も敵討も尤のやうなれども事柄に於て決して其目的ある可らず且彼の忠臣義士にも夫程の見込はあるまじ唯因果づくにて旦那へ申譯までのことなるべし旦那に申譯にて命を棄てたる者を忠臣義士と云はゞ今日も世間に其人は多き者なり權助が主人の使に行き一兩の金を落して途方に暮れ旦那へ申譯なしとて思案を定め並木の枝にふんどし掛て首を縊るの例は世に珍らしからず今この義僕が自ら死を決する時の心を酌で其情實を察すれば亦憐むべきに非ずや使に出でて未だ歸らず身先づ死す長く英雄をして涙を襟に滿たしむ可し主人の委託を受て自ら任じたる一兩の金を失ひ君臣の分を盡すに一死を以てするは古今の忠臣義士に對して毫も恥づることなし其誠忠は日月と共に耀き其功名は天地と共に永かるべき筈なるに世人皆薄情にしてこの權助を輕蔑し碑の銘を作て其功業を稱する者もなく宮殿を建てゝ祭る者もなきは何ぞや人皆云はん權助の死は僅に一兩のためにして其事の次第甚だ些細なりと然りと雖も其の輕重は金高の大小人物の多少を以て論ず可からず世の文明に益あると否とに由て其輕重を定む可きものなり然るに今彼の忠臣義士が一萬の敵を殺して討死するも權助が一兩の金を失ふて首を縊るも其死を以て文明を益することなきに至つては正しく同樣の譯にて何れを輕しとし何れを重しとす可からざれば云々」

即ち楠公の如きは文化の進歩に何等の益なしと論じた。此の思想は、徒らに西洋文物の華やかさに盲目となれる當

時の人々の絶大なる共鳴を得て、此の本の賣行の如き、その初年に於て既に二十何萬部とかの數に上つたと云ふ有樣でありました。この福澤諭吉は人も知る慶應義塾の創始者であり、その生誕百年祭が最近盛大に行はれ、新聞雜誌等に於て、その賞讃の聲猶喧しきを見る現狀であります。實に日本精神を根底より破壞した人が、現在堂々たる地位を獲得してゐるのであります。日本精神の喪失は實に一朝一夕の事ではなく、實に由々しき大問題であります。

この學問のすゝめ第六編の一番始めに、「政府は國民の名代にて國民の思ふ所に從ひ事を爲すものなり」とあります。先般、「イン・ザ・ネイムス・オブ・ゼア・レスペクティブ・ピープルス」（人民の名に於て）として條約が締結されんとして大問題となつたことがありました。これは明治初年以來一部の人々の間に存する思想を代表するものであり、先の福澤諭吉の思想の反映であるのであります。その他に彼の皇室論の中にも此思想が多々現はれて居ります。今日の所謂「インテリ」階級中に存する所の誤れる國體觀、自由民權思想は、明治七、八年以來決定的な勢力を得て、後五六十年の間益々助長せられ、思想界を風靡して今日に至つたものであります。故に今日この儘の日本を以て、純乎たる日本であると云ふ事は斷じて出來ません。然してこれを純乎たる日本にかへすには、己れ一個の小智小才を以てするが如きは、皇國百年の大計たるの所以にあらず、斷々乎として日本傳來の古い傳統に基かなければならぬのであります。

かやうに先生は楠公を標的として慨然として起たれたのでありますが、當時幕府を向ふに廻して　皇政復古の大事を考へることは、非常に危險なことでありました。然し先生に於ては生命など全く問題にされて居りません。

いのちだにをしからなくにをしむべき
ものあらめやはきみがためには

命でさへ捧げ奉らんとするのでありますから、　の外に土地、財産の如き、どうして惜しいことがあらうか、と言ふのであります。之は落籍奉還の思想と一致するものであります。

さて、　皇政復古の大事に邁進しやうとして先生は郷里を後にはる〳〵京都に上られたのでありますが、その時の歌に、

君がため朝霜ふみて行く道は
たうとくうれしくかなしくありけり

一歩み歩めば歩むたびごとに
みさとへ近くなるがうれしさ

あきつかみわが　大君のおはします
みさとのつちはふむもかしこし

暫く轉じて現實の日本を見たいと思ひます。當時の京都は今日の東京であります。東京人としての最大のよろこびは、實に　天皇陛下のおはします都といふことでなければならない。之が東京の唯一無二の名譽であつて我々が無限の感激を覺ゆる所以であります。人口が日本一になつた、世界の第何番目になつたと云つて喜ぶが如きは何事であるか。いたずらに有象無象が殖え、地域がだゞつぴろくなつたとて、何の喜ぶべき事がありませう。然も市民は實際に於いて何を喜んで居りませうか。果して　陛下がおはしますことを有難く思つてゐるでありませうか。十月一日は東京市の記念日でありますが、之は東京市に自治が許された日であります。是は何たる事でありませうか。東京市最高の感激の日は　明治天皇東京御奠都の日でなければならないのであります。一昨年の十月一日でしたか、市電の中に掲げられたのを見たのでありますが、市長の告諭として、『玆ニ本市最高ノ佳節タル自治記念日ニ當リ』云々とありました。然るに見よ、東京市は自治の名に於て嘗て或は砂利を喰はれ、或は瓦斯を食はれたのではなかつたか。自治を許された日は、かくて何等の誇りをも我々に感じさせないのである。誇るべきはたゞ御奠都の日である。しかるにその御奠都の感激は何處にあるか。眞の日本人の心は何處に見ることが出來るか。佐久良先生を考へる時に誠に慚愧の外はない次第であります。明治、大正、昭和の歴史は、後世史家の嚴密なる批判を受けなければならぬものであり、將來の歴史家は、之を書くに非常のなげきをもち、ほとんど書くにしのびざる事ばかりでありませう。實に慨嘆に堪へない次第であります。

先生が京都に參られて詠まれました歌に、

日の本のやまとの國の主におはす
わが　おほきみの都はこゝか

日本國の御主神たる　大君の都は此處であるか、と先生は大いなる感激にうたれると共に、日本國の　天皇陛下が果

して今日日本國の御主神として、その御地位を保つておゐでになるのであらうか、と嘆かれたのであります。今日も亦全くその當時と同じ有樣でありまして、我々幸にして學ばなかつたのでありますが、官吏の多くが學び又學びつゝある法律に於ては、實に授れ多い事でありますが、　天皇は御主神として考へられてゐないのであります。現在問題になつてゐる機關說の如きは、まことの意味は一般には知られてゐませぬが、之を歷史的に究明すれば更に驚くべく、恐るべき重大なる問題であることが判るのであります。明治、大正、昭和の歷史は嚴密なる批判を受けなければならないものでありますが、此の思想の動亂は、甚く處フランス革命にあることは明瞭な事實であります。私はこの思想の動亂を究める爲には、フランス革命にさかのぼらなければならぬと思ひまして、フランス革命の研究に着手したのであります。この研究の爲めには幾多の書物がありまして、あらゆる方面から觀察してゐるのでありますが、その中でケンブリッヂ大學のロード・アクトンのレクチャー・オン・ザ・フランス・レボリューション（フランス革命史講義）の中に、「人民は國家を改造しなければならぬ。」と主張し、又、「國家を統治するものは國民の機關でなければならぬ。即ち人民の主人にあらずして人民の使用人でなければならぬ。」としたと見えて居ますが、之がフランス革命の思想であります。この思想が明治以來の日本の支配的法學思想となつたのでありまして、此の斷案を以て機關說を觀る時、こゝに問題は重大となるのであります。

佐久良先生は純粹忠義の心を以て京都に上り、　皇政復古の大業に奔走されたのでありますが、この時の先生の精神のもつともよくあらはれてゐるのは、左の歌であります。

事しあらばわが　大君の大御爲
　　人もかくこそ散るべかりけれ

一旦緩急あらば、　陛下の御爲めに櫻の花の如く潔く美事に散つて行かなければならない、先生の櫻に對する感激は全くこゝにあつたのであります。然してこの態度が純正日本人の櫻の花に對するよろこびをうけるものであることは前に申し上げた通りであります。

この歌の自筆を私共あちらこちら探してみたのでありますが、どうしても見付からない。ところが卷紙に乃木大將が書かれたものが、學習院に殘つてゐるのを發見しました。之に依つてみれば、花と散られた大將の精神も、全くこゝにあつたのでありまして、我々感銘を新にしたのであります。

不幸にして先生は櫻田門外の變後捕へられて、遂に櫻の花の如く散られたのであります。時に齡五十でありました。

私はこの點に於て實に感激させられるのであります。

二十代の青年が、熱情にかられて國事に死するは、未だ妻子等の係累がない爲に、必ずしも困難なことではない。然しながら四十五十となつて幾多の係累錯雜、情實纏綿の內に、眞に最高の道德を見出して、之に死する事は容易な業ではありません。眞（マコト）の學問は五十代の人をして潔く花と散らしめ、二十代の人をして靜かに眞（マコト）の道に沈潛させるものでなければならない、之が眞の學問であると確信するものであります。正しく四十代五十代の人をして、最高道德の爲めに敢然として死せしめ、二十代の人に對しては、はやる心を抑へて靜かに沈思默考せしむる底のものでなくて

はならないのであります。古人先哲皆然り。深くこゝに思を致されんことを切望するものであります。

即ち若し青年の血氣によつて事をなすと言ふならば、血氣のなくなつた五十代となつては何物をもなし得ないであらう。眞の道を體得せる者は、いくつになつても惑ふ所なく、恐るゝ處なく、進み得るのであります。眞の道を求めるのが根本の問題であるといふ事を考へなければなりません。

先生五十歳の時の歌に

おきふしもねてもさめても思ひなば
立てしこゝろのとほらざらめや

これは　皇政復古の大事業を、いかにもして成就させようとする確固たる決心であります。精神一到必ず成る、果せるかな、先生の死後七年にして　皇政復古の大業は遂に成つたのであります。

かくて明治卅一年　明治天皇は特に先生に從四位を贈り給ふたのでありました。この御贈位とは、如何なる意味を持つてゐるものであるか。一昨年でしたか山崎闇齋先生に對して正四位より從三位に位を進められてゐます。死した る人に對して位を與へられ、或は位を進められるのはどういふ意味であるか。これは我々は普通の事として殆ど不思議にも思はないのでありますが、外國人には實に不思議に考へられるのであります。ラフカディオ・ハーンは之に對し「日本には驚くべき事がある。死に失せた人に對して位を與へられ、又は進められる事である。之は實に驚くの外はない。之は恐らくはそれらの人々は一人も死んでゐるのではなくて、永遠に生きてゐるからであらう。即ち精神は後世迄も傳はり、未來永劫消えることはないとして、かくはされるのであらう。」と云つてゐます。まさにその通りでありまして、我々の先哲は七生報國、永久に生きて　大君を守護し奉るのは嚴然たる事實でありますので、それ故にこそかくは　陛下より位を賜はり、又は位を進められるのであります。

私はこの事に關してフランスの社會學者コントの言を思ひ起すのであります。彼に對しては全體としては反對すべき點がありませうが、只一つ敬服すべき事は、「社會は現に生ける者によりてのみ構成せられるものにあらず。」と云ふ一言であります。即ち今日の日本が現在の九千萬の國民のみによつて構成されてゐる、と考へるのは重大な誤謬である。現在生きてゐる者が勝手に多數決によつてこれを動かしてよい、自由に　皇國を改造してよい、とするが如きは絶對に許されないのであります。楠正成公も現に生きて居られるのである。山崎闇齋先生も、佐久良東雄先生も共に生きて居られるのである。この事實を無視して、我々が單に我々のみの考を以て事を爲さむとするが如きは、僭越至極と云はなければならないのであります。

楠公の生存を認め、吉田松陰先生の生存を認めて、是等の先哲の指導を仰ぎ、そのあとを慕つて進まなければならぬ。こゝに我々のいろ〳〵の考へ方に於て、從來のものとは全く違つたものが出て來るのを思はねばなりません。かやうに御贈位と云ふことに關聯して、國家社會と云ふ言葉の裏にかくれてゐる深刻なる意味にまで、考を及ぼさねばならぬのであります。

佐久良先生の不幸なる一生を通して得る吾等の感激は、以上申上げました外に、多々ありまして盡きないのであり

ますが、時間がさし迫りましたからこの邊で打ち切らうと思ひます。申上げたい事は非常に多く、しかも取急ぎ僅か二時間半の間に端折つて申しました爲、御了解の困難な事も多かつたらうと思ひます。亦言葉使ひの粗漏な爲に、お聞き苦しい點もあつた事と存じますが、充分お考へ下さつて、その意のある處をお汲み取り下さる樣お願致します。

要するに　皇國今日の重大問題は、日本人自らが眞の日本人に還るといふ事を以て、根本緊要の問題とするのであります。これは一見無意味の樣であるが、決して意味のない事ではない、と云ふのは、現實の日本の姿と眞の日本の姿と、を對照する時、感得出來る事であります。是に於て我々の爲すべき事は、古人の精神を明らかにし、その精神を我々の胸中に喚びおこし、古人と共に進むことである。一度傳統を絶ち切つて進まんか、それは斷じて健全なものにあらずして、實に危險極まるものである。我々は全力を以て傳統を取りもどさなければならぬのであります。

私の申上げました中に、現實の問題に對し、餘りにあせり過ぎ、或は憤り過ぎ、言過激にわたると非難し、又はよけいな心配はしなくてもよい、日本は現在の儘進んでも何等の動搖を來す樣な事はない、と言はるゝ人があるでありませうが、之に對し私は若林强齋先生の御言葉を以てお答へしようと思ひます。先生は山崎闇齋先生の第一等の門人の一人である淺見絅齋先生の、第一の門人であります。或時一門人が先生に問ふて云ふには「日本は實に有難い國體であります。國家開闢の初め天壤無窮の　御神勅を戴き、寶祚隆々として榮え、　陛下は現にその御位に在つて天下をしろしめし給ふ。實に　皇運萬々歳にしてお目出度い次第であります。」と申しますと、先生は色をなして、「何を言ふか。貴樣の樣な馬鹿者が居るから心配するのだ。歴史を見よ。平の清盛が居るではないか。足利高氏、義滿が出たではないか。我々下々のものとしては、再び斯くの如き者が出ない樣に、戰々兢々薄氷を踏むが如く思ふて、國家を護持せねばならぬ。どうして安心して居られやうか。」と怒鳴られたのであります。私はこの强齋先生の言葉に深く服するものでありまして、近時に於ては高氏も敢てせず、義滿すらもどうかと思はるゝ恐るべき思想が、明治の初より起り、今日特に甚だしきを見る時、日本人として一日も安閑として居られるかどうか。切にお願ひしたいと思ひますのはこの一點に十分注意なされて、眞の道を誤らざる樣進んで頂きたいことであります。今日の御話はこれにて終ることに致します。（完）

392
322

昭和十四年四月廿日印刷
昭和十四年四月廿五日發行

【非賣品】

東京市杉並區馬橋二ノ二四五
編輯兼發行人　神田兵三

東京市麴町區飯田町一ノ二二
印刷人　兼平小治

東京市麴町區永田町一ノ三一
發行所　日本革新黨本部

終